様式 C-19

# 科学研究費補助金研究成果報告書

平成２３年５月１８日現在

機関番号：３２７１０
研究種目：基盤研究（Ｃ）
研究期間：2008～2010
課題番号：２０５２０１３９
研究課題名（和文）　能楽鼓胴の装飾に関する調査研究

研究課題名（英文）　The Study on Ornamental Decoration of Japanese Traditional Drum Body

研究代表者
加藤　寛（KATO HIROSHI）
鶴見大学・文学部・教授
研究者番号：７０１６１１１４

研究成果の概要（和文）：大小二つの能楽鼓胴は、従来、雅楽の鼓から変遷を経て成立したと考えられてきた。本研究では3年間に渡る公共機関および個人所有の蒔絵鼓胴を中心に調査を行い,鼓の内部構造と蒔絵様式の視点から能楽鼓胴の成立を解明した。その成果については詳細をまとめ鶴見大学ほかで公開する予定である。

研究成果の概要（英文）：The traditional way of thinking on organized of Japanese drums from Gagaku to Noh. This investigation had researched public and private collections of Japanese traditional drum bodies with inside structure and *makie* decorations, mainly is very especial study during 3 years. This obtain results are open to the public in Tsurumi University and other Museums.

交付決定額

（金額単位：円）

| | 直接経費 | 間接経費 | 合　計 |
|---|---|---|---|
| ２００８年度 | 1,300,000 | 390,000 | 1,690,000 |
| ２００９年度 | 900,000 | 270,000 | 1,170,000 |
| ２０１０年度 | 1,200,000 | 360,000 | 1,560,000 |
| 年度 | | | |
| 年度 | | | |
| 総　計 | 3,400,000 | 1,020,000 | 4,420,000 |

研究分野：人文学
科研費の分科・細目：芸術学・芸術学、芸術史、芸術一般
キーワード：芸術諸学、工芸史、芸能史、民族音楽

１．研究開始当初の背景

能楽鼓胴に関する調査研究については平成 10 年、11 年度に東京文化財研究所が行った「地方に残された古楽器の調査研究」が知られている。能楽鼓胴の成立は、能という芸能の成立と深く関係し、従来の考えでは雅楽の二鼓あるいは三ノ鼓が小型化して能楽の鼓になったと考えられてきた。しかし、全国に残る田楽や散楽に使用される鼓を詳しく調べてゆくと、雅楽の鼓が変遷を遂げて能楽の鼓になったという確証を示すことができなくなってきた。東京文化財研究所の研究の内容は、全国の社寺、博物館等の施設に保管資料のアンケートを取り寄せ、関連する資料を対象として調査を行った。アンケートの回答から全国の神社仏閣に奉納あるいは神楽・能など現在でも演奏楽器として使用されている鼓胴の保管状況を取りまとめることができた。調査は、2 か年に分けて行われ、代表的な所蔵先は東大寺（奈良市）、名古屋能楽資料館（名古屋市）、能楽資料館（篠山市）など全国を対象として今まで不明であった中世資料の発掘を行い、成果を上げた。その成果は、「一遍上人絵伝」など絵画資料に

残されていた雅楽の二鼓・三ノ鼓から分かれたと伝えられた大小の鼓が神楽のための楽器であり、直接能楽に転じたという従来の説を見直す必要があると判断した。その結果、新たな能楽鼓胴の成立に関する研究の継続の必要性が生まれた。

２．研究の目的

能楽鼓胴の成立については従来の研究から雅楽の鼓が転じたものとされている。しかし、雅楽の鼓胴と能楽の鼓胴は内部構造が明らかに違い、演奏法も平均律を奏でる雅楽に対し、能では音のグラデーションに重点を置く違いがある。さらに、乾燥した状態で演奏する大鼓に対し湿した状態で演奏する小鼓の対比など、様々な不明点がある。また「東北院歌合」をはじめとする職人歌合に描かれた、「白拍子」と「曲舞」の両者の持つ鼓の表現に明らかな違いがある。白拍子の持つ鼓は、胴の中央に三筋の突起があり革の周囲に黒い塗料と思われるものが塗られている。また、鼓の打ち方が雅楽の三ノ鼓と類似する。それに対して曲舞の持つ鼓は革が白く明らかに能楽の大鼓の前身の姿をしている。すなわち能楽の大鼓は雅楽の三ノ鼓から白拍子を経て曲舞へと変遷を遂げ、さらに能楽大鼓に至ったと考えている。しかし、能楽小鼓胴の成立は独自の発展を遂げている。大鼓が革を乾燥させて拍子の頭を打つのに対し、小鼓胴は革を湿らせ、調緒を握ることで４つの音と低い音から高い音へとグラデーションを作ることができる。今回の研究では従来の外見を中心とした変遷ではなく、鼓胴内部の形状の変遷と表面に描かれた蒔絵装飾の様式から小鼓胴の成立を追ってゆく。具体的には能楽鼓胴の内部構造を測定してセクション図を描き、構造から屋外で演奏する薪能及び室内で演奏する歌舞伎の鼓を比較して成立と基本的な変遷をたどる。さらに、鼓の蒔絵装飾には桃山から江戸時代にかけての特徴を示す作品が多く見られるため、装飾からの視点も交えて成立過程を解明する。本研究では蒔絵鼓胴の装飾を対象にして、能楽鼓胴と蒔絵の関係を対象として調査を行い、さらに蒔絵の手板を作成することで桃山・江戸の装飾との関連を技法的にも解明する。大小の鼓に描かれた装飾の時代的差異や装飾技法の変化などから能楽鼓胴の成立過程を明らかすることを目的として調査研究を行う。

３．研究の方法

平成 20－22 年度にかけて日本全国を３分割して未調査の寺社や博物館など、特に個人コレクターや家元を対象にして調査を行った。平成 20 年度は九州、四国、中国を中心にして佐賀県では佐賀県立博物館において旧鍋島藩の能楽器及び関連史料の調査を行った。また、佐賀県の豪商高取家の保存する能楽器及び能楽史料の調査を行い図録作成の援助を行った。高取家の「雷神蒔絵大鼓胴」は、戦国時代の鼓胴に桃山時代の蒔絵で飾っている。上の乳袋には空を飛ぶ雲を梨地と平蒔絵で表し、下の乳袋には雲間に太鼓の撥を持った雷神がユーモラスな姿で描かれている。「かみなり」、まさに「神鳴」である。楽器の蒔絵には音をあらわす文様が多いが、大音響とともに落ちてくる雷のように大きな音でなる鼓であることを証明しているわけである。戦国時代に作られて大きな音が出るようになった大鼓に桃山時代の蒔絵師が描いた合作である。また、「貝尽蒔絵大鼓胴」は、総体に濃梨地を作りその上に漆を盛り上げてから金蒔絵を施した薄肉高蒔絵で栄螺・雲丹・蛤などの貝を平蒔絵で表した縁起の良い文様である。さらに「葡萄蒔絵大鼓胴」は、両乳袋から実の付いた葡萄の房と葉を梨地と平蒔絵で表した高台寺蒔絵で仕上げられている。文様は武士の魂を表す「武道」を意味し、この枝に栗鼠が止まれば「武道を律す」の意味となり、戦国時代の武将が最も好んだ文様となる。高取家の蒔絵鼓胴は豪華な桃山蒔絵で飾られていた。島根県三保神社宝物館の所蔵する能楽楽器類の調査、熊本県立博物館の補完する旧細川家関連の能楽器などを調査した。国立能楽堂で開催した特別展「住友コレクション一能面・能衣装・能楽器」でカタログを執筆し蒔絵鼓胴の解説をした。カタログには「香包蒔絵小鼓胴」、「芝桜蒔絵小鼓胴」「葵蒔絵小鼓胴、「鞍鐙蒔絵小鼓胴」など６点の大・小鼓胴を調査し、セクション図を完成した。また蒔絵では大鼓胴の蒔絵が梨地と平蒔絵を併用し、細部に針描を加えるいわゆる桃山時代の高台寺蒔絵であらわされ、小鼓胴には平蒔絵・螺鈿・切金などを併用した元禄時代の蒔絵が見られた。平成 21 年度は関西および中部を対象として兵庫県篠山市の能楽資料館の補完する能楽器及び関連調査として能衣装を調査した。名古屋能楽堂において開催された特別展「大蔵家能楽器」において戦国時代を代表する名筒の調査を行った。大蔵家はもともと奈良県に在住し 17 世紀の初めに江戸に移住して能楽を広め「大倉家」と改姓した。奈良にいるときは鼓製作に深く関与したと思われ多武峯の周辺に住んでいた鼓製作者が、大蔵家なきあとは京都烏丸などに移住している。展示作品である織田信長拝領の「瓦落」は雅楽の鼓を思わせる大ぶりの乳袋と太い棹、室町時代に作られた胴の上に、沈金とよぶ先のとがった彫刻刀で葡萄の文様を線刻し、その中に細かな金粉を詰め込んで文様としている。この鼓の内部の受けには「大蔵九郎」の墨書があり、春日大社に残されている同文様の「葡萄沈金小鼓胴」の墨書名「宮増弥左衛門」から、二人

がアンサンブルを組んでいた 16 世紀初めに使用された鼓と確定できた。「瓦落」の名の由来になる大きな音は屋外で演奏する薪能などで遠くに響く音をイメージできる。弥左衛門の小鼓胴の内部を調査したところ屋外演奏に適した巣間の長い構造をしていた。また、豊臣秀吉拝領の「海松文蒔絵大鼓」は、戦国時代の鼓胴に金銀の高蒔絵で海松文を表した豪華な鼓胴である。鼓は道具であるので演奏を妨げる螺鈿や高蒔絵などの盛り上がる装飾を嫌う。しかし海松文蒔絵大鼓の蒔絵は、すべての蒔絵表面を丸く研ぎあげ、演奏者の手に納まったと考えている。さらに、京都市在住の能楽家元志和家所蔵の鼓胴及び蒔絵鼓箱の調査を行った。平成 22 年度は石川県立美術館所蔵の能楽器調査、岐阜県高山市の花山神社所蔵の神楽面並びに岩城神社を訪ね、建久 2 年の鎌倉鶴岡八幡宮の鎮座祭に多好方の使用した日本を代表する鎌倉時代の大小の神楽鼓胴を調査した。従来、この鼓が「一遍上人絵伝」に描かれた大小の鼓に当たり、雅楽鼓胴から能楽鼓胴への変遷を示す過渡期の資料であると考えられていた。しかし、今回の調査でこの鼓は神楽の鼓で能楽に使用する鼓の構造を持っていないことが判明した。2010 年 12 月、国立歴史民俗博物館が大阪市吹田のコレクター生田家から蒔絵小鼓胴 35 筒を購入するという情報を得た。生田家は明治末年に大日本麦酒を民営化した朝日麦酒を起業し、代々鼓の研究を行い、大正 8 年に「鼓筒の鑑定」及び「鼓筒図譜」を刊行した。鼓の研究書は現在まで鼓に関するバイブルと言われている。生田家の保管する鼓は合計 108 筒､ほとんどが小鼓胴である。この時期に本格的にコレクションを国立歴史民俗博物館で調査できる幸運に恵まれた。コレクションの中には山桜を手彫りした古筒も混じっている。初期の小鼓胴は山桜や淡墨桜などの比重の重く硬い材料が使われた。これらの材料は硬すぎて轆轤で成形することができないのですべて手彫りで内部を作り上げている。おそらく口伝では「阿古」や「千草」などの能面打ちが製作者とされているので古く世阿弥の時代までも遡ると思われる。しかし、能面うちは桜のような堅い材木を使って表を作ることはない。おそらく演奏者が千草あるいは阿古など面打師を通して木地師に筒の製作をさせたのだろう。初期の筒は手彫りのために中心をとおる正中線が曲がり、縦に置くと傾く鼓もある。また、内部の構造も荒く削り取られて、現在われわれが見る左右対称になっていない。想像するに初期の小鼓胴は演奏者のすぐ近くで木地師が内部を削り、音を鳴らしてまた削る、という試行錯誤を繰り返し完成させたのではないかと考えている。さらに外形も古様ものは大鼓を小型にしたように乳袋の下か角張っていて、見るからに大鼓を写したと思える形状となっている。雅楽の鼓の名残である中央の三条の丸帯もおそらく手に当たって演奏に差し支えるために削り取って、平滑な表面を作った。初期の鼓で音を出すための内部の構造が決まると、木地師のうちの刳物師から轆轤師へと生産体制が変わり、ある程度の量産体制に変化する。宮増弥左衛門と大蔵九郎が活躍した 16 世紀の初めには、轆轤による鼓作りが完成したのだろう。材木も硬い山桜や淡墨桜から柔らかなシュウリザクラなどろくろで成形しやすい材料に変わっていった。能楽鼓胴には二つの頂点を示す時期がある。春日大社や談山神社などで行われる薪能の中で行われる屋外演奏が一つ。江戸時代に盛んになる歌舞伎のための室内演奏が一つ。室内演奏が盛んになるのは屋外で演じられていた歌舞伎が、室内に移動する 17 世紀半過ぎ、京都烏丸に折井弥助堂本が活躍する。堂本の作る鼓は乳袋内部の海とよぶ空間が広く巣間が短い。つまり遠くに響く薪能ではなく、豊かな音量の室内演奏の楽器が完成する。弥助の筒は全国の大名から引く手あまたで、生産が追いつかずに贋作が出回った。そのために、初期の手彫りの筒の外形を轆轤に掛けて削り取った「ヤスケ形」の鼓が出回ることになる。鼓の変遷を鼓の外形から追うのが難しい理由は、この時期に古い鼓の改作が行われたからである。能楽鼓の成立に関する研究は、途についたばかりといって差し支えない。本研究では鼓の内部構造と蒔絵装飾の様式から編年を追い、更に遡って成立期を確認した。

４．研究成果

3 年間の調査研究により全国の博物館・資料館・能楽堂ほか個人コレクターの所蔵する蒔絵鼓胴を調査し、以下の通りの成果が見られた。

(1) 大鼓の筒の製作は戦国時代のものが多く、蒔絵は桃山時代の高台寺蒔絵で描かれていた。また、小鼓胴は戦国時代終わりから桃山時代に筒が作られ、蒔絵は 17 世紀後半に描かれたものが多い。筒と蒔絵の時代的差異については、筒の製作から奏者が演奏し始めて約 100 年を経て音が完成するために、名筒と呼ばれてから蒔絵を描く習慣ができ上がったためと考えられる。

(2) とくに大鼓の蒔絵は梨地と平蒔絵で描かれ、細部に針描を加えた高台寺蒔絵の手法が多く見られた。また、図案であるが桃山時代に来日したポルトガル人の持ち込んだと思われる洋鳥などの文様や音にちなむ茄子や瓜など「実がなる」、鉄砲や烏帽子などの「大きな音がする」、鍵と蔕の無い梨の図「じょうずへたなし」など興味深い文様が見られた。

(3)蒔絵の復元は「柊蒔絵代鼓胴」（東京国立博物館）および「鉄砲蒔絵大鼓胴」（神戸市立博物館）の作業工程を移して行った。柊蒔絵大鼓胴は、永禄 9 年の墨書を持ち、桃山時代の梨地と平蒔絵の装飾に見えるが梨時と平蒔絵を一つずつ完成させながら次の工程に進むといった、室町の本格的な蒔絵技法であった。戦国末期から桃山にかけて日本の工芸技術が大変換する。漆芸も室町まで続いた根来塗や蒔絵の手法が、きたるべく輸出の時代に向けて合理化され、曲物・挽物・指物といった木工技術の全てを使って創られた根来塗は、挽物や指物のみの高い生産制の技術へと変わってゆく。蒔絵もまた高蒔絵や肉合研出蒔絵などの複雑な技法も梨時と平蒔絵の単純な技法へと変化していった。技術から表現へ、豪華から瀟洒へ日本の工芸が変わりゆく時期に、成立した能楽小鼓胴も屋外から室内へと音の構造を変換した。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計６件）


① 加藤寛、三橋鎌岳作　獅子牡丹彫木前机、総持寺展、神奈川県立歴史博物館、2011、145-149
② 加藤寛、蝶秋草漆絵太鼓樽の保存修復、鶴見大学紀要　第 48 号第 4 部、2011、123-135
③ 加藤寛、奇跡の継承　美の使徒　修復家たち―漆の修理と修復材料―、日本芸術の創跡、2010、256―262
④ 加藤寛、香包蒔絵小鼓胴、住友コレクション、国立能楽堂、2008、117-118
⑤ 加藤寛、国立能楽堂コレクション展、国立能楽堂、2008、200-201
⑥ 加藤寛、高取家写真集、佐賀県立博物館、2008、65-66


６．研究組織
(1)研究代表者

加藤　寛（KATO　HIROSHI）
鶴見大学・文学部・教授
研究者番号：70161114